
幻夢抄録 目覚め 1 2 章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 目覚め 12章

【Nコード】

N1043A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

胡国・皇后に影で仕える紫嵐は、主が、母の『形見』ともいえる、勾玉を持っているのに違和感を感じる。一方、氷魚と瑪瑙は、敵国・胡国の皇太子である、居候の天河の正体を隠そうと必死に立ち回っていた。人々の思いが、複雑に絡み合う…異界が舞台の、壮大スペクタクル！

形見（前書き）

どうも、維月です。

これからどんどん、話が盛り上がっていきますよ。

でも…紫嵐と、その主のやりとり、かなりヘビーですが、まあ、楽しんで読んでくださいな

形見

宮殿内、早朝。

「紫嵐、奥方様がお前を呼んでいるぞ」

背後から、いきなり声をかけられて、彼女は跳びあがった。

振り向くと、そこには、自分の主付きの、侍女がいた。

「わ、分かった、今行きます」

「分かったのなら、早くお行き、奥方様は忙しいのですよ…お手を煩わせるんじゃないありません！」

「はいっ！」

紫嵐は、一瞬にして体を歪ませ、その場所から掻き消えた。

彼女が行ってしまってから侍女は、一つ鼻を鳴らして、ぼそりと呟いた。

「フン…所詮、滅ばされた、蛮族の生き残りめ。奥方様のお情けなしでは、生きてゆけぬ下賤よ」

「はい、奥方様：お呼びでしょうか」

紫嵐は、息も切らせずに、主の前に傳く。

そんな彼女を、甲高い音楽的な声が迎えた。

「ああ紫嵐、お前に見て貰いたい『物』があつて、呼んだのですよ。この、勾玉を、ね」

「それは!？」

血の色のごとく、赤く、つややかなその宝玉に、紫嵐は戦慄した。

それは昔、自分の母が、肌身離さず、身につけていた物だったからだ。

紫嵐の反応に、彼女の主は、いやらしく、口許を歪める。

まるで、その反応を、待っていたかのように。

「ああ…これは昔、友だった、お前の母から貰った物です、どうか、しましたか？紫嵐」

「い、いえ…よく、お似合いでございます」

「まあ、嬉しいこと」

「奥方様…」

紫嵐は、気取られぬように、主の様子を伺う。

主の、自分をここに呼んだ思惑が、今ひとつ、分からなかった。

「ときに、天河の行方は、つかめていますか？」

「はい、現在、私も総出で、搜索しております」

「そう…分かりました、下がちなさい」

「御意に」

音もなく、紫嵐が去ってすぐ、彼女の主は、小さく呟いた。

「紫嵐め、気づいたのか？いや、まさか…な」

紫嵐の中で、記憶の断片がちらつく。

それは、忘れもしない『あの日』のものだ。

燃えさかる、家屋の残骸 逃げ惑い、殺される者の断末魔。

そして、憎悪に歪んだ 女の、顔。

刀、飛び散る血。

（似ている？いや、そんな筈は…ない、筈だ）

似て、いた？

あの時は、自分も幼かったし、見間違いだろうか？

しかし妙だ。

始終、母の側から離れなかった自分は、一度たりとも、奥方様など

見たことはなかった。

あの時を除いて。

なのに、なぜ主は、母の勾玉を持っているのだろうか？

分らない。

同時刻、氷魚は、食卓で盛大なため息をついていた。

ことある毎に、瑪瑙と天河が、ぶつかり合うからだ。

今も、一つのおかずを巡って、ケンカしている。

「コラっ、てめえ居候の分際で、食い過ぎだ！」

「えー、いいじゃん別にい」

堪えていた氷魚に、ついに青筋が浮く。

「ああもう、うるっさいっ！ケンカなら、外でしてっ」

氷魚は、テーブルを強打して怒鳴った。

「す、すまん…氷魚」

「ったく、てめえのせいで、叱られちまっただろが」

しゅんとする天河の脇を、瑪瑙は小突く。

「あたし、終わったから、先行くからね？」

食器を流しに下げて、台所を出て行く氷魚を見送って、天河はぽつりと呟いた。

「…瑪瑙」

珍しく名前を呼んだ天河に、ほう、と片眉を上げてから、瑪瑙は目を合わせた。

「なんだよ」

「しつこい男は、嫌われるぞ、じゃね」

「んな！う、うるせえっ、余計な世話だっ！」

含み笑いをして、台所を出て行く天河に、瑪瑙は憤慨した。

「はあ…お母さん、もう聞いてよ、瑪瑙ったら、ホントに子供くさいんだから！」

氷魚は、母の墓前で愚痴っていた。

二本の刀についた朝露が、朝陽を含んで、キラキラと光る。

一頻りの風に、氷魚は、髪を押さえた。

「お母さん…あたし、どうしちゃったのかな？別にね、どこが悪い訳じゃないんだけど、最近、なんかヘンなの」

「ヘン、って？」

「え！？」

突然、返ってきた返事に驚いて、氷魚は、後ろを振りむいた。

「天河！？ダメじゃないっ、勝手に出てきちゃ…いくら村はずれと

はいえ、誰かに見つかったら、どうするの!」

「だーい丈夫、気配も、妖気も今は発してないし、俺の変化は…よっぽど鋭いやツじゃないと、見破れないよ」

「もう!びっくりしたわ…」

やっぱり楽しそうにする天河を、じと目で見てから、氷魚は言った。

「ごめん、ここ…墓だったんだな」

「うん…母さんと、兄さんのだよ」

俯き加減に言った彼女に、天河は、はっ、と息をのんだ。

「どうしたの?天河」

「いや、なんとなく歩いてたら、氷魚がいたから…」

「そっか…さてと、戻ろっか、瑪瑙一人、置いてきちゃったし」

笑顔で言ったつもりだが、声が、震えた。

「涙…」

天河は、氷魚の頬を伝う涙を、そつと指で拭ってやる。

「え、やだなあ…どうしてだろ?涙、出ちゃう」

「氷魚、そなた…独りなのか?」

独り、そうだ。

確かに、自分には、家族がいない、奪われてしまった。

けれど…

氷魚は、ふるふる、と首を横に振った。

「『独り』だけど、だけどね?あたしは一人じゃない、瑪瑙も、村の人たちも、天河、あなただっいてくれるもの…寂しくなんかないわ」

につこりと笑いかける氷魚に、天河も、はかなげに微笑んだ。

「お前は、強いな…さて、戻るか。でも…一緒に戻ったら、またどやされそうだが」

「そうねえ…」

一方その頃、家に一人残された瑪瑙は、ながいす榻にふんぞり返り、愚痴をこぼしていた。

「つたく…アイツ、氣にくわねえ」

アイツとは、もちろん天河のことだ。

歩調荒く、砂利を踏む足音が近づいてくる。

瑪瑙は、氷魚が戻ってきたと思い、視線だけを扉に向けた。

しかし、蹴破る勢いで、玄関のドアが開く。

そこにいたのは

「はいはい、お邪魔するよ！父さんから、話聞いたよ。嫁をもらったって？」

「か、母ちゃん！？なんだよ急にっ」

そこにいたのは、瑪瑙の母だった。

「お前にも、ヒト並みのことができたんだねえ、驚きだよ」

「あ、あいつ、今いないんだよ…悪いな」

瑪瑙は、慌てて理由を取り繕う。

冷や汗が、一筋、背中を伝った。

（ま、まずい…アイツがいるの、バレちまうじゃねえか！）

「あ、そう…じゃあ戻ってくるまで、待たせてもらおうかね」

「いや、だからさ…」

そうだ、こういうヒトだったよ…このヒトは。

瑪瑙は、がくり、と肩を落とす。

「柘榴の妹なんだってね、どんな子だい？」

「どんなって、カワイイよ」

「へえ」

そんな時、扉が開き、氷魚が顔を覗かせた。

「ただいまあ…あら、お客さん？」

「あつ、ああ…母ちゃんだ、お前に会いたいわって。入ってこいよ」

「う、うーん。なんか、緊張するなあ」

笑ってみせてから、氷魚は、玄関のドアを閉める。

その顔は、少し、引きつっていた。

「ほら母ちゃん、氷魚だよ」

「ど、どうも、氷魚です…」

はにかんで、氷魚は笑う。

しかし瑪瑙の母は、氷魚を前にして、竦みあがった。

「宵華しょうか！？」

「え？」

「あ、いや、ごめんね…あなたが、あの子の娘かあ、あの時は、どうなるかと思っただけど、よく戻ってきたね…おかえり」

「あ、あの…泣かないでください」

急に泣き出した彼女に、氷魚は、困ったように話しかけた。

「ごめんね…年を取ると、どうも涙もろくてね」

瑪瑙の母は、目尻の涙を、指で拭ってから笑った。

「つくしゅん！」

突然、会話を割ったくしゃみに、氷魚は、天河を外に待たせていたのを思い出した。

「いつけない！外に出しっぱなしだった！」

「どうしたんだい？」

不思議そうに、瑪瑙の母は、首を傾げる。

「居候さんなの、ごめん天河っ、早く中に入って！」

「あ　　もう、いわんこっちゃんえ！」

氷魚が、天河を引っ張り込んだ瞬間、瑪瑙は呻いた。

「どうか、したのか？ヘンな顔して」

天河は、相変わらず脳天気聞いてくる。

「いいのよ瑪瑙、大丈夫だから、今は…」

「あらあら、まあ…」

瑪瑙の母は、興味深げに、じっと天河を見た。

「どうも、天河っていいまして、ここで厄介になってます
あっけらかん、としている天河。

その脇で、瑪瑙は、氷魚になだめられていた。

「へえ、旅人さんなの…どこから来たんだい？」

「ああ…北です、この辺りは、氣候がいい」

「そうかい、それにしても、珍しい髪をしているよ、キレイだねえ」
「ははは…」

渴いた笑いが響く。

まさか、化けている、なんて言えない天河である。

話しもそこそこに、いそいそと部屋に引っ込んでいった。

「あんたは幸せモンだよ、瑠璃、いい娘を貰ったね」

「ああ…まあな」

照れて、顔をそむける瑠璃に一つため息をついて、彼の母は、嬉しそうに笑った。

「娘ができるなんて、嬉しいねえ、ウチは野郎ばかりだから。でもさ…氷魚ちゃん、ホントに、この子でいいの？この子、バカよ？」
「ばっ！余計なこと言っくんじゃねえっ」

「余計じゃなくて、ホントのこと言っただけさね」

からから、と明るく笑う彼女に、氷魚は、いつの間にか、緊張が消えているのに気がついた。

「やれやれ、忘れ形見というか、なんというかねえ…さて、そろそろ帰るとするかな」

瑠璃の母は、腰掛けていたテーブルから、腰を浮かせる。

「おう、さっさと帰れよ」

「コラ、瑠璃ったら、なんてこと言っのっ」

氷魚は、慌てて瑠璃を窘めるが、彼女は、気にした風もなく、明るく笑った。

「ああ、いいのいいの、この子…いつもこんなだから」

「もう、瑠璃は…今日は、わざわざありがとうございます」

「いいや、じゃあ、気が向いたら、ウチにおいでよね、歓迎するよっ」

「はい」

氷魚は、面倒くさがる瑠璃を玄関先まで引きずって、彼女を見送った。

「いい、お母さんだね」

「そうかあ？単に、世話焼きなだけだろ」

「意地っ張り」

くすくす、と笑う氷魚を、瑪瑙は、抱き寄せて言った。

「さつきは…悪かった」

「うん」

視線が絡まり、互いの唇が重なりあう。

しかし、甘やかな雰囲気、またも天河が破った。

「もしもし、なんか、忘れられてて悔しいなあ」

「てーめーえー…何度も、何度も邪魔ばっかしくさりやがって」

「」

再び、険悪な雰囲気が復活し、氷魚は、額を押さえた。

「やっぱり、どっか行っちゃおうかしら」

真実の輪舞（ロンド）（前書き）

主との間に、軋轢を感じていた紫嵐。
そんな彼女を、予想だにしない真実が襲った！
異界が舞台の、壮大スペクタクル。
『幻夢抄録 目覚め 12章』ここに！

真実の輪舞（ロンド）

風が、まだ家屋の残骸の残る、焼け野を浚^{さら}っていく。

紫嵐は、一人、佇んでいた。

「母上、あたしは…信じたく、ありません」

風の中、彼女はぼつりと呟いた。

『あれ』は間違いなく、母の勾玉だ。

（主さまが、それを持っていた、というのが意味するのは…）

「まさか…」

突然、背後からした唸り声に、紫嵐は慌てて身構えた。

「ゴウユー!?」

目の前に現れた、人面の猪　　ゴウユは鼻息荒く、地面をかい
た。

紫嵐は、後ずさる。

自分でも、敵うかどうか、分からない相手だからだ。

「ほお、お前：妖猫の長の所の、娘っ子かあ？」

高いとも、低いともとれない、囁^{ささ}れた声が言った。

「なっ、なぜ、ここに来た！」

「ふっ…お前も愚かよの、真の敵に仕えるとは。お前の母上が生きていたら、どう思うかのう」

ゴウユは、ちらり、と小さな目で紫嵐を見てから、嘲笑うように一
つ、鼻を鳴らした。

「う、うるさい!?あたしの質問に答えろっ」

核心をつかれた紫嵐は、声を荒らげる。

「あの女は、お前の母を殺した…ただの気まぐれで、滅ぼされた
知つても尚、あれに仕えるか？」

「なに、今…なんて言った！」

しかし、それには応えずに、ゴウユはゆっくりと、向きを変え始
めた。

「懐かしい匂いがしたので来たまで、まあ…お前も気をつけることだ。殺されぬようになあ」

地響きをたてて、去っていくゴウユを見送り、紫嵐は、強く拳を握りしめた。

爪がくい込み、地面に、点々と赤い雫が落ちる。

「奥方様が…敵!？」

紫嵐は、空間を歪めて、砂塵と共に消えた。

「紫嵐めえ…あ奴、やはりっ」

水晶玉を覗いていた紫嵐の主は、卵大の水晶玉を握りしめる。小さな亀裂が走り、ついにそれは、音をたてて砕け散った。

「紫嵐、来なさい、お前に話があります」

夕餉の後、部屋を出ようとした紫嵐を、彼女の主は呼び止めた。

「おそれながら、奥方様：私からも、お話がございます」

「そ…そう、では行きますよ」

「はい」

紫嵐の主は、そっと、帯の間に刀を差したのだった。

「奥方様、ここは？」

夜風が、紫嵐の茶髪の一房をさらっていく。

「お前は…気づいてしまった」

崖の先端に立っている主は、谷底に、小石を蹴落としながら、呟くように言った。

谷底には、魚も棲めない、急流が流れている。

紫嵐は、身構えた。

「奥方様、やはりあなたが…あなたが母をつ」

「あれは、ただの狩りでした…その中に、お前たち母娘^{おやじ}がいただけのこと。気の毒なことをしましたね」

紫嵐は、齒を食いしばった。

この女は、自分を騙していた。

ずっと、信じていたのに…！

優しい言葉をかけてくれた恩で、ずっと仕えてきた。

彼女の為なら、どんなこともした。

間者、暗殺。

なのに…。

主の口から紡がれる言葉は、憐憫のかけらさえ、感じられない。
ついに、紫嵐の目には、涙と、憤怒が宿った。

「奥方様、あなたは！」

瞬間、鈍い衝撃を感じて、彼女は一つ、瞠目した。
なにが起きたのか、分からなかった。

深々と、胸郭を貫く、一振りの刀。

紫嵐の口許を、血が伝った。

「な、に！？」

「お前など、もう必要ありません。母のもとへ、行くがいい！」
底冷えのする瞳が、ぎろりと紫嵐を睨みつけた。

刀身が、引き抜かれる。

紫嵐は、しぶく血糊の中に、横倒しに倒れた。

衣の裾を、翻して去っていく主に、必死に手を伸ばす紫嵐。
しかし、その手が、主に届くことはなかった。

「ちくしょ…ちくしょうっ！！」

（母上、あたしは。なんて愚かなことをしてしまったんだろう、な
ぜ…）

震える足で、なんとか立ち上がると、紫嵐は豹に姿を変えて、漆黒
の夜空に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043a/>

幻夢抄録 目覚め 12章

2010年10月14日12時03分発行